216.4
M235

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235

ガラス使用

益氣物語

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235

ガラス使用

益氣物語惣目録

一 升田日蹟由緒之事

一 益氣山佐伯寺退轉之事

附り 鐘の銘 之事

一 山脇九右衛門 礒野源大夫由緒之事

一 羽柴筑前守秀吉公西國出陣之事

附り 野口神吉城攻之事

一 秀吉公益田山に市左陣之事

附り 礒野源大夫山脇九右衛門手柄之事

一 羽柴冬議秀吉公姫路城攻之事

附り 山脇九右衛門荒神谷にて蜷蛇退治之事

216.4
M235

国立国会
29. 7. 22
図書館

336301

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235

ガラス使用

都倉宗膳房由緒　　益氣郷古蹟

一外田新邑新田開発之事
附　堤横堰成就之事
并　新田一町之百姓解散之事

一平之荘熊野権現宮益氣郷へ分座之事

一熊野権現遷宮之事

七社諸神體由来之事
并　神職高橋氏に定まる事

一武仲彦兵衛磯野源左衛門同三郎大夫を伴ひ三木へ行大酒之上大力之事

一山脇九右衛門磯野源左衛門同道にて二見へ行事

并両人大酒に乱伏之事

一山脇九右衛門儒道を立て醫業之事

一磯野源左衛門佛道飯食之事

目録終

益気物語

抑播磨國印南郡益気の郷は往昔伊弉諾伊弉冊
の二神出現ましましし時此山の東なる岩橋の空ち
天のぬぼこをさしおろし淡路の島をなぐりそめ大日
本を成給し跡ふ旧跡あり日本紀神代巻抄に曰く又
播磨風土記に八十橋あり天上より八十二神降臨しゐ
曼伊弉諾伊弉冊降臨し処としられども冊後天の橋
立の義を本とすと云くり播磨風土記に曰く益気の里に
石橋あり傳に曰く上古の時此橋天に至り八十人衆上
下往来故八十橋とつふとゝ夫木集に前大納言顕幹卿
雪ふれは天の羽衣白妙に風さへ渡る八十の岩橋
此辺に天下泉村あるゆゑ斯く詠じ給ふにや誠に此益

気の里は無双の名所なり又乾の方に池有り柿本人丸の歌に

立かへり益気の地のうきめをかくれとしたぬる物にそ

ありける

扨また此里は益気の郷と号し其權輿を尋ぬるに其説區々なり一説に法花山法道仙人印土より来朝まします当国印南郡八栗の峯に法花山を開基しぬ其折から当国に三十三所の堂舎を建立し世に並なき名師なしかのみならず本朝にて飛鉢の術を得ぬ此三人の隨一なる法道仙人は法花山にましまし鉢を飛ばして其比紫雲公場丸と京船米穀を上方運送する折から風波はげしく

此南海の磯に船を寄せ砕を懸け居たる折から法道一行飛鉢を飛ばし施を乞ひ給ふ藤井是は御厨米に候へば供養する事なりがたしと答へ其時米船器ことごとく鳥の立つごとく法花山へ飛び行く藤井仰天し法華山に立ち道に聞し次第を語り侘奉るに道笑つて急し給へば不思議や米の元の如く雁の群れ立行くごとく船へ入りしとなり其内米壱俵南海の里に落つ其処を米田と号し今此辺を雁南の浦と唱へ又は南雁の立行ごとくに米船へ入りたる故その米を計りたる升此里へ来たる故升田と云ふとも聞えたり又或説には熊野權現宮堰明神井面明神大神宮氏子共里々へ離散

此所書誤リアリ其ニテ殘紙しるしなしが其後剥ケタル跡ヨリテ不明

〻跡に殘る窪田田中の兩氏の田と益気の升とを取り升田とつふるもあり何れか實説ならんや考ふべし

元亨釋書に曰ク

〈サキ靈〉

鷲山ノ中ニ仙人花五百ノ持明仙金剛摩尼法ヲ修シテミナヨリ仙道ヲ得タリシカバ須臾ノ間十方刹ニ遊ンデスナハチ本處ニ還リケリ神力スデニカクノゴトク壽無量劫ヲ得テ人天ヲ化導シ利益スルカレニ法道其一人ニテアリケルサレバ或時紫雲ニ乘リ花ヲ出デテ支那ヲ經ワタリ百濟ヲ過テ我日域ニ入リ播州印南郡法華山ニ下リケリ其山ヲ法華ト號スルコトハ八ノ朶ワカレタルガユヘニ八軸ニ表シテ名ケタリソノ時溪谷ノ中ヨリ五色ノ光ヲ出シケレバ法道コレヲ見テ此コソ靈區ナレトテ居住ヲシメ常ニ法華ヲ誦シ且ツ密觀ヲ修セリ護持スル道具トテハ千手大悲ノ銅像佛舍利寶鉢ノミニテ餘ノ長物ハナカリケリ一日多門天王雲ニ駕シ來リ法道ニ語リテ曰ク大仙久シリ此ニ棲メリ我マサニ正法ヲ擁護シ邦國ヲ鎮撫スベシ又牛頭天神形ヲ西ノ峯ニ現ジテ曰ク我レ願ハクハ災ヲ除ク役ニ任ゼントソノ後

前同樣

〈シカバ天龍鬼神來往シ且ツ奉事シケリカリテ常ニ鉢ヲ飛バシテ供養ヲ受ケタリケレバ州ノ人空鉢仙人トコレヲ稱スサレバ生石大明ノ請ハレケルハ鉢ヲ石ノ上ニ置カンベシサアラバ其供物ヲ奉ラレトソレヨリモ其地ヲ空鉢塚トナヅケテ今ノナホ神祠ノ西南ニアリ然ルニ大化元年秋八月ニ船師藤井公

大明ノ下脱ヵ アラシ

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235
ガラス使用

塩ノ租米ヲ舟ニ載セテ通ラケンニ法道ノ時鉢ヲトバシテ
供物ヲモヒタリシカバ藤井ノ曰クコレハ御厨ノ用事ニ精
米ナリ私ノ情ニハマカシガタシトカヽリケレバ其鉢スナハチ飛去リテ
行キタリケンコヽニオイテ船中ノ多クノ米ノ鉢ニ隨ツテトビ
ツラナルコトタトヘバ雁陣ノ山中ニ入ルガゴトシ藤井大ク驚キ
テ奔ツテ庵所ニ至リ後悔懺謝シテ憐ミヲコフトコロニ法道
ハコレヲ聞キ笑ツテ許諾シケリ其言オハルトソノマヽカノ米石ハ
前ノ如クニトビカヘル其千石アリシガ更ニ遺失スルコトナク其
中ニテ一俵ハ南河ノ上ニ落チニケリ此ヨリ此地ニハ富メル人
多カリキ世此處ヲ名ケテ米隋村ト号シ又ハ米田トコレヲ
イヘリ是ハ人皇三十七代孝德皇ノ帝ノ御時ナリ

益氣山佐伯寺退轉之事并御本尊之事

附リ鐘銘之事

此御ニ益氣山佐伯寺ト申ス大伽藍アリ其草創
ヲ尋ムルニ詳ナラズ人皇九十四代花園院ノ御宇延慶
年中ト申傳ヘタリ天台宗七堂大伽藍の大地なりしたる
人皇百一代後小松院嘉吉年中赤松左京大夫滿祐
上總介義則カ子山名持豊と數度合戰あり其時當寺の住侶赤
松滿祐に組し軍陣の謀計をなす持豊是を聞きて大きた
ゝり先佐伯寺破却すべしと軍兵差向ケ風上より火を懸け
て堂塔一宇も残らず回禄したり如此の大地なれば種々靈
寶記錄等是あるべけれども其節寶藏共に燒失した
る故造る記錄なし不思議なるかな其時煙の中より本
尊阿彌陀佛二王の左の玉眼に乗じ八十橋の峯の巖に光

コノ所モ張紙ノハゲタル所アリ

將軍義教ヲ赤松滿祐討チシ故トイフ

明赫奕として立給ふを西念寺の住侶見奉り非喜の涙を流し如何ばかりに包み奉りて帰り霊験あらたなる尊像なり殊に此寺の本尊は五百御人の畫像なれば幸に本仏願望の折からなり本尊に崇奉りたりそれより段々繁栄し当時近郷に勝れたる寺ゆゑ本堂再建有之数百年不退の道場なり兵乱の砌軍用の為に取退けん鐘三本郡久留美邑慈眼寺に今現在せり彼寺の記録に三本古城主別所長治追討の節秀吉公より賜之之処紛失佐伯寺退轉は康應年中之三本陣は天正八年之比そ百九十余年以前の事之

鐘の銘に曰く

播州印南郡益田村佐伯寺鐘

大檀那　沙弥道佛為二親云々
沙彌圓性為二親并比丘尼浄空

大助成人　真如

合力人　沙弥覚禪　尼浄性一　尼無心一
僧唯覚　尼了念一　沙弥覚一
沙弥教阿

右衛門尉佐伯基治　尼明性一
尼明了一　左衛門尉佐伯氏信
左衛門尉佐伯秀真　佐伯氏有　夜叉女　僧信覚
右兵衛尉佐伯家任　佐伯信朝　長景信
結縁衆　左兵衛尉平重成　沙弥道念　沙弥西蓮
僧覚眼　沙弥道圓　藤原氏女

336301

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235
ガラス使用

左近將監藤原吉信　藤原家幸

佐伯宗俊　鋳

右為一紙手鑑興助成之事出離生死願證菩提也

延慶二己酉四月廿四日　大工伊豆宗友

人王九十四代花園院延慶二己酉至今安永六丁酉既四百

六十九年也成

如斯施主皆官名也慮に佐伯寺は格別の靈場なる事

無疑其旧跡堂屋鋪とゝもし千餘あり

山脇九右衛門藤原大夫由緒之事

抑此郷に山脇九右衛門と云ふ人ありて其まゝ性を尋

ぬるに往昔織田右大臣平信長公の家臣山脇嘉兵衛

門尉の一族に山脇九祐と云ふ人あり聊の事ゆへ浪人

して播州印南郡養氏郷に知る辺有て居住しける此人に

男子數多あり嫡子山脇九右衛門二男同名新右衛門

同名祐大夫と云ふ九右衛門武家より出たる人なれば

文武両道を嗜み別て鈍術の奥儀を鍛錬し近郷に

門弟數多あり農業は家事に任せ長押に弓鎗鉄炮

を飾り家富栄豊に暮し居られたる所に又磯野源

太郎と云ふ人あり是も織田の家臣磯野丹波守の一

族成しがゆ細あつて浪人し山脇九助と壱所に立退則

縁家となり互に むつましく是は砂辺村に住し土民と成り

名を磯野久兵衛と改め男子弐人あり嫡子磯野源大夫

二男磯野四郎九郎つと云元来源大夫は鈍術を好殺

生を楽しみ長押に弓鎗を飾る家業は自然善者居つ

秀吉ノ下評ノ版ヤウカ

に仕て家事を抱、武士の格にて家業昌して世上に居られたり、此は天正六年寅三月信長公西國の大守毛利輝元を討亡さんがため此度西國退治の大將は心強く武勇ある謀臣にも達したるものは羽柴筑前守と仰付られ秀吉退に及ばず成敗の為に都を立て三月七日播州加須屋が館に着陣ふ翌日より國中の諸侍出仕せしめ門前に市をなし美々敷かりける次ひより或時別所山城守三宅肥前守治忠両人軍評定の為に秀吉の館に行きけるに秀吉の曰く長治両國の案内者たるべきと宣ふに就て信長公の名代として下向す各々の軍法の次第不日に敵を一敗ひしぐ謀計もやのべきと問はれければ三宅申様西國發向の先手別所家に仰付られ我等存ずるに日は今度の事合戦は一國一城の争ひ合

とは格別なり輝元は大身なり兵数一生の合戦なりすべもなくては叶ふまじく時間取られ候はんと存ずるそれにつき先陣の張様別所家代々数多く死は先斯々と秀吉に申しければ秀吉宣ふは各々は先手の役にて候へば働等の事隨ふ情に入られ候へ勝利を得る下知は大將役に此方より之を同申べしと要敷射に宣ふ故両人は内にして故障咀脚を撫て帰城しけるとなり

羽柴筑前守秀吉公西國出陣之事

附り野に神去屋城しる事

去程に別所の一族家老の面々矢合して是を評定す山城守申されけるは今度秀吉當國に下向して近國他國に威を振ひ別所の家臣に向ひ意趣なく我意を振舞ひ

ふのみならず剛、付下人の如く接待し國人に頭を上させず
様にする事心底を察するに大將信長の謀計と存ずる
其子細は近年東國のはなを聞に関東に四大將あり北
條氏康武田信玄織田信長上杉輝虎也其内信長
の武勇敵は表裏第一なり表裏に義理の二つ有り
武士の敵を計謀異なる様別の事なす信長は偽を事と
なし行ふに家風下々迄軽薄多し唯今思事するに秀
吉西國（下向の内談先別所長治中國先手をさせ西國
を当國（下向の内談先別所長治中國先手をさせ西國
静謐において初の事約往々は長治を退治し播磨は
秀吉に宛行へり信長の心底鏡に移るごとし敵の表裏
を知るならば謀に乗らんる武士たらんしの思意なきに似たり
此方より色を立てんと申されはれば長治宣はされば長治宣は

前より信長兄弟の思を可成などしきりに宣ふに付一味同心
して大將を入行はれとと迫事しける所に定て信長が
子息の中信忠か信雄か中とやと思ひぬれば秀吉を差
下さるゝは信長浅智の故なり元大將を立るには其人を
撰ぶる事一と異朝にも陳勝秦の代を傾けんとせしに付
陳勝自大將たりしを後に秦の左將軍章耶に討れぬ
其後楚の項羽は懐王の子流浪々として在けるを取立
て主義帝と号し秦を攻滅せ後に秦の代を大事ひ取しと
假令当座威有りといへども姓もなき人を大將にしては諸人
軽んずる者也秦の章耶四十万の兵を率して楚に降へ
せしを項羽大將とせず楚の項伯は鴻門の会の時高祖の
命を助けたりし人なれども漢に降参して高祖敵て大將に

用ず是陣笠の人を大將に用ざる例く無るに何ぞや昨今信長の取立尾州愛智郡の土橋漸侍の眞供をする秀吉を大將として長沼彼が先にて軍せば天下の物笑ひたるべし此上は初の約を変じて向後信長と手切として其驕に先づ秀吉と合戦すべしと宣へば舍弟小八郎治定行年十七歳進出軍は不意に發するに利あり兵勝の術密に敵の機を察して速に其利に乘じて疾く其不意を撃つべしと云へり長盛議して敵に其色を悟られ逆寄に寄られば悔とて甲非なるべし其人數四五百人統はり候へ今夜とても明夜にても夜討して三方に火を放て一方に火へ候へ敵を追ひ出さんと異論する其時東国勢を遣立て切倒し本陣に切り入るに於ては秀吉を討るべしと高声に云ひければ

別所甚大夫斬く思案して法謀一理無にあらざれども如何秀吉に合せんと思ひ敵國に対人ふたは即時に打出敵に逆を為せば夜討など無るべし手立也流石に大國多く討取り天下に旗を立る程の信長卿の秀吉如きの侍五人三人失ふとも損なは思はれず同じくは互の色を立て懸合の戦を仕り敵引取らば寸暇を惜び追さば引離り縦横に恐程ならば敵は他國味方は自國なり兵粮労れてなどかは退屈せざる人費に乗て中國の加勢を請て一度當て破べし跡に續て責上り京都に於て一戦を遂一日成とも天下に誇を立るならば借使戦場に尸を曝すとも名は留天下武門の望む所なり其上當家の累祖青松円心は苔縄の城より打出在の手立をして敵を攻亡し武名を末代に揚元弘の古例に任られ候へ

かしと云ければ山城守の曰く甚大夫申す処宜く覺るさらば籠城の支度あるべしと近辺の城主侍大将（田文を遣し先づ志方には櫛橋左京亮重隆神吉民部大輔頼貞淺河には淺河彈正忠高砂には梶原平三兵衛尉景治野口には長井四郎左衛門政重端谷には衣笠豊前守元賀等最前より人質を出す故に異議なく一味同心して我が居城を守る残る小城をば悉引拂ひ上月中村高橋服部後藤長谷川大村神澤光枝上原魚住賀古加須屋來野垂井飯尾藤田以下名人質を出して其勢七千五百餘騎三木城に楯籠りたる抑三木城と申すは前には大河流れ後には高山峨々として林に續て人家多く巖峙道さかしく難所に数代武将の一族数を尽し八千餘騎にて楯籠る近辺の侍大将淺河志方櫛橋

神吉高砂野に端谷此人々は隠れなき武勇の士共城々に楯籠り委敷が敵三木へ寄るならば三木方十方より駆寄て即時に敵を追拂ふべしと軍兵を励ます侍悪たり斯て秀吉思慮深世に賢き大将にて当国の安国者を召寄の国中の諸国をさせ山川険難を尽も知り軍兵に知らせて後家老の面々に向て宣ふは当国の敵共熱を集て我々居城守り居る時は秀吉三木の城へ攻入時四方より後詰して追掛入る謀なり善き者は人を整し又弱き者は人を整すとそへり又愚将の敵の所所へ難儀無理なる弱をなす良将は敵の心に違て勝を得る也当国所々の小城の兵士共三木の後詰をせんと計る言を聞て先づ弱き方より利を得るならば小城共は書つずと云ふ成べしさあらば後に四安かるべし三木の城を攻入に心安かるべしと四月

三日早朝より長井四郎左衛門が搦手に籠る堅口の城に押寄せる
僅四五百騎成なれば手に取るように為て待懸りたる
事なれば城櫓の狭間を開き中国名誉の鉄炮の上手強
弓精兵を深て城際まで敵を引付け百餘坊の衆徒の中にて
勇坊十輪坊此二人は日本無双の大強力にて大盤石を指上げ
数十騎打殺し大利を得たり先手の軍兵すみかねひるむ
所を十輪坊の火煙責迫四尺八寸の太刀を　し一散に敵二
三十騎討落し進入城主四郎左衛門下知して大鉦を鳴す
く一度に打立ける間寄手の大勢手負死人府墓倒に堪ず
逃散双方へ伏にけり逃間なく打懸れば一陣不叶半町計り
引退く元来此城播州一の名城にて東南大沼西北は山林
四方沼田にて駈引自由に成りかたく寄手強く責れ

井落ぶ方便無りけり左あらば城を埋め平地たかして我はぐ
三日の間に落べしとて近辺の草木青麦を苅取せて夜の間
に埋めけり沼も城も平地に埋上げ三日の間逃間なく攻れども
城中弱る気色もなく味方既に我ひ負れたるを寄手見給
ひ大音声にて中国の武士と始めての合戦に弱気を見せて美
濃尾張の物笑ひぞ是ぞ大事と城の埋口より逃間なく攻入
れと下知して鳥をつかせず我ひける終に城四方より間打ち崩
し我先に乗れよ討せすとも十騎は外り一度板連乗廻散々
我ひけるさしもの勇士もたまり得ず皆散々に成り
失せければ漸く残る勢五六騎のはかりに成りたけり四郎左衛
門叶はじと思ひけん和談を請ふ寄手軍兵聞もあくず
降参は以前の事是程に慧居すと今一年を助くる事叶ふ

ましとおもひて思ふ大将秀吉宣ふは軍は六七分の勝を十分とす
降人を討果すは安けれども敵軍門に入りては降も勝を得
助る者ぞ敗軍の者に指をさすなと下知し給へ城主四郎左
衛門未練の振舞哉とて二人の剛力の衆徒等三本の槍引
籠る四郎左衛門は秀吉公の情を受て危き命を助られ
みれんの至なる大月秀吉公長井が城を退散し給ひ本陣
横藏へ引き神吉城攻の軍評定し給ひけり
斯らしかば中國の守護毛利右馬頭輝元へ長治より使者を以て
播州軍立の様子委細に注進して加勢をもとめられ依之小早川
左衛門佐隆景吉川駿河守元春両大将に三万騎を差添備
州と作州の境に陣を取る信長卿の嫡子秋田城之助信忠三万
余騎にて播州表に出で在々所々に陣を取る毛利家の軍勢
近付ば一戰を遂げんと欲す又毛利家の両大将は評議数日を送る
処に別所の余党神吉に楯籠るを聞敵して中國の敵に気を
失ひと思ひ軍兵を打寄せ四方八方に尺寸の地も不殘打囲ム
螺鐘をならし攻寄せ〳〵遠間なく鯨波を擧城際近攻寄せ
既に飛入らんとする所に城中より完竟の射手を揃鉄炮を
入れ遣打立射立ける程に四方の堀に飛入りければ若武者共
三百余人討れ跡に續く東國勢も討れければすこし城際
を押寄る処に寄手の諸大将の下知として足軽共を方々へ
遣て竹木を切り寄せ能程に把銘々手々に押立〳〵大手の城
戸口まで寄寄る之を近中國に竹束と云事かなし不思議
なる手立と寄に相遣しそりかる所に大手の矢倉れの赤を
引ず開せて歳来二十八九歳成男卯の花威の鎧着て槍を

いで童に持せ皆紅の扇を開き大音上げ當城の大將神民部とつふ者也別所小三郎長治に賴まれ今日當城に於て討死すべし同死する道にて天下の大將信忠の眼前にて聲華に軍して剛臆の程見せて死せん事武士たる者の本意たりと甲を取て着しのびの緒をしめながら櫓より下り大手の門を開せ先竟の兵二百余騎前後左右に隨ひ面も振ず切て出で大勢の中へ破て入り懸つ返しつ暫か程攻戰ふ木戸際に守たる敵千余騎を一町計り追ひ靡け時方を見れば僅に五十騎計りに討なされ開せと引けると雖も去不知して爰ぞ利を得る所迯敵に除ふて門の内に付入り込入るを民部少輔門外にて馬より飛んで下り神吉重代の打物備前の菊一文字則宗二尺九寸有りけるを右のふ脇に引そばめ押入る敵に走り懸り當るを幸に打廻る此勢に辟易して逃る者をば追ふ神吉民部と云ふ者と名乘懸て切て廻る大方此切先に向る者討れずといふ事なし東國勢の中に取り籠られて既に討死覺えし所に城中より是を見て大將を討すな續けやと百騎計り駈出で打て懸りけるに少し場所を押開と見えし時民部を打連れのゆ引入れけるを大勢の敵ひ喚き叫んで込入り攻ける間遂に外構一重打破られける所に橋詰に六尺余りの大の男音曲と猪首に着て黒革威の腹巻に三尺余りの大長刀を提て高声に名乘けるは昔八幡太郎義家奥の加後三年の戰ありし時鳥海弥三郎に左手の眼を射られ其矢を抜ず當の矢を射返せし鍾馗權五郎景政に四代孫梶原平三景時が末葉梶原重右衛門入道冬菴と云者也三木の城より

一騎當千に撰まれ加勢に来る近國の者共は某が手並は知り候へ共其車國武士は今日始て見参なり宮て手並を見よと て橋の行桁を走渡る車國勢同に怒け吾討取らんと五十騎打連てはて思る冬菴から〳〵と打笑ひやさしき人々いで物見せんとて虚に長刀の石突追取延八方手廻さず切廻り敵三人坪の中へはて落し一騎に深手を負しける残る一騎と引組首ふつと掻はねて左の手に提橋桁を閑に渡り本陣に飯り暫く息を継にける敵味方是を見て誉ぬ人は無りけり其後板倉が臣に續三木の加勢の内小寺主馬助柏原治部右衛門中村壹岐長谷川権大夫藤 藤次武仲鬼彦冬菴が渡りたるを手本として敵味方行桁を走り渡り〳〵戦ていける或は討死する人あり或は引組て坪底に

る者あり橋の上の合戦半なりける所に城主民部が家の人神主藤大夫民部が伯父一命を助給へ民部を討て味方に参るべしと云ければ信忠子細のまうしと宣ふ何とも方便なく手なく民部討れてより役所〳〵に乱入り四方八面に追散す掘多冬菴軍は半なるに稍き味方の有様也とて手の者三十人左右に隨へ打入る敵に是かしこにて宮合戦ひけるが即等次第に討れ主従三騎に成りければ難波の手に怒らんとはとて是役所に走り故橋の四方に火を放ち自害して煙の中へ飛び入り名を末代に残しけり信忠卿は神主にて討取首共實検あり即ち三木へ押寄られ其辺巡見有て即時に落城なりがたしと思ひ行桁にや二三里か程に向城を二三所付させ此仕置有て手ぬきに下知有て信忠卿は上洛あらしと

なり、安永六丁酉歳迄二百年に及べり

秀吉公益田山に陣を在陣し事

付 磯野源大夫山脇九郎右衛門手柄の事

天正六年戊寅四月上旬珊瑚堅筑前守秀吉公は野に神吉の
両城を責落し給ひ益田山に陣をかれ三木の城攻の評
定有しが秀吉公仁ある大将なればあたら名将を討たさん事
本意なきずと思召し和睦の書翰を認められ飛脚を遣る時
五月末の事なれば折節入梅の雨篠をつき霖川水岸をたゝ
ぬりの通路なし皆々當惑したり秀吉公宣ふは此辺に水練
得たる者あらば申出べしとの御仰山脇九郎右衛門磯野源大
夫罷出我れに仰せ付けられ候はゞ早速御書翰相届申
度しと言上しければ御感ありて御書を受取課に成り御書

を頭に聚と結付平之丞日光山の麓より立渡に両人ともに助合ひ
無難向ふの河岸に渡付夫より別所家へ馳付取次を以て首尾
上る長坂公拙見之仰られ付けるは追る返答仕らんと両人畏
て御前を立無難に成り右の口上相述御暇給りたる前代未聞
の手柄く末世の今に傳へけり其後秀吉公両人をとり出され
先當座の褒美として桐のそうの御紋付の羽織両人に給はり
「それより山脇磯野両家の紋桐となり成りしが寛文七年松平大和守直矩
公就後の村上より姫路へ移り給ひし故山脇家は九曜に改替磯野家は
丸に矢筈其外一類面々紋改替けり」

其上何にても望之少と御仰両人畏て申上るは我々共立民
の事に候へば別に望無御座候我る之者共に候
へば瀧野より高砂潮境迄川道遠を御下さるべし

と言上す然らば免し取らすべしと申印書を賜りける
両人難有と頂戴して寺前を罷立て帰りけり

羽柴参議秀吉公姫路居城之事

付 山賊九右衛門つ荒神佐柄退治之事

其後羽柴参議秀吉毛利と攻めと下向し大せい今辰
月十七日先三木城主別所公を亡し三木の城にましませし
が姫路の城主小寺官兵衛尉隆元より秀吉の元人ならざ
るを知し故秀吉公に申すは三木の城は国土なり姫路は国
の中央にて海陸便りよし播磨を領し給はゞ此城に移り給ひ
るべしと迎へ参らせ其身は東鹿へ立退それより秀吉公は姫路に
居城ましましけり吉によつて小寺は後に筑前の福岡知行五十
三万石余の大守と成りゆふ黒田長政と賜る碓野佐右衛門山

脇九右衛門両人は七月中元の寺孔に登城す寺庭物として壱
尺三寸ある鯉一献寺両人を以て差上る秀吉公大に寺檀場
宴敷両人寺盃を下置る此盃壱外式合入る南京沙鉢へ
寺肴として鳥目壱貫文為銘々寺頂戴仕り寺暇仕り寺前
を下りけり去る碓野佐右衛門は寺肴天川氏へ所用有て先達
て帰り九右衛門に別れ寺肴の方へ急ぎ行九右衛門は荒
神石へ差懸りしが折節草もゆるがぬ日なれば松のしげみ
の下陰に暫く煙艸莨らし休居る処に風も吹ぬに松の梢さはり
と音するは不思議と後を屹度見上れば式丈はかりの白蛇
耳を立眼は赤銅紅の色を帯る立飛鳥とする九右衛門
秀吉ずず波平二尺三寸のかたな抜放し飛違切付たりかま
首すつぱとは落せば躯は枝に引上る直に刺留刀押ぬ

ぐい鞠に納めしばらく息を休め立ち処をさして帰りけり

右刀山脇家重寶と本家に相傳セシ九右衛門四代の孫山脇義右ノ介弟同名文藏所持セラレシが明和八癸卯十二月十七日に歳七十七にて病死其以前病中辛ノ庄山角村熊野権現宮へ奉納ス此人文学ヲ好武道ヲ嗜ミ万事器用人也

都倉宗膳由緒

三木郡高木の住人都倉宗義は別所長治ノ一族故小三郎長治に一味し羽柴筑前守秀吉公に攻られ破られ落人となり加古郡神野村に聊知辺ありてしばらくかくまはれ居られしがそれより後元御池原村平山辺に住居し猶又秀吉公の勢を憚れ剃髪深衣の身となりて則法名を宗義庵と号す二男あり一男は宗伯庵二男は宗雲庵と号し歌連歌詩作を楽しみ居られけり然るに宗膳庵は泉州岸和田に縁家ありて兄宗伯を伴連れられて引越しなりしが程なく紀州中納言様へ仕官次第に出世ありて今和歌山の侍家中に都倉氏九家あるよし岸和田へ罷越されしより今安永六丁酉年迄年数九十百八十二年になる第宗雲庵は跡に残り還俗して都倉仁右衛門と改名して家相續す其故を以て此家を庵の仁右衛門と云傳ふ今庵甚左衛門（中喜）の兄弟也都倉宗膳甚子宗雲都倉仁右衛門と改名す甚ノ仁右衛門甚ノ仁右衛門甚ノ文藏甚ノ今の甚左衛門

益元の郷古跡

先壇上が嶽と申すは前は大河幾尋共なき関之今は埋りて田地となる

塔が碕とつふ事は古塔に似たる大きなる岩道の街に生出しを
旅人の障り成りしを数多の石工を集あやしとく山に経塚あり
馬塚鬼に杖突松なり右の方に壇上岩とつふ岩あり上に日月
星の形あり手の穴喧嘩乱の時平山平大夫市郷を取事先
岩に立し所とつふ
壽命山地蔵寺本尊地蔵菩薩後前なる川中に地蔵岩あ
り此所すあからせぬかとつふ峯は愛宕山地蔵権現の社あり
手屏風が嶽山上に望岩天狗杉あり焼山に石馬盥駒の足跡
あり古の権現山なり天の岩橋八十橋の事下の角を八十岬とつふ平山
に井積明神井面明神の二社あり神体いざなみの尊にてまし
す神前に福井とつふ清水あり平山の北に益田池あり神の池訂
に弁才天おはします神仏は寿命菩薩市子稲倉魂命本地は

正法明如来則観音とかゝうと塚見石穴横行八百穴の口に石
の唐櫃ありしを往昔榊原式部大輔様姫路城主城の市
時鷹狩に市出張あそばされし折から穴ぐらの口ふの石のかす
うと市咲ありて能泉水と市愚望あり数多の人夫を怨け
大八車ふ載て姫路へ引せられしか共志方境杉峠迄引
付候ひしが平の地境迄に動かずして今に彼峠あり蓋は
穴ぐらの口に有る地底又兵衛といふ人大谷に立拾石の田地
を開発し今に又兵衛新田とつふ下を柳峠といふ昔ほ弁
天児と但し池の汀の石上に祝しぬ事折しあり田の水入彦
おつとつふ人拝せし事ありとて偽ふされば池底神の池平
の権現池内出水池此三ヶ所の池はいかなる旱魃にても池
水つきずとなり

池原村

助右衛門　又右衛門　仁右衛門　四郎兵衛　久大夫
長左衛門　八郎九郎　重右衛門　長右衛門　治右衛門
次郎大夫　長大夫　忠兵衛　義大夫　権右衛門
九郎兵衛　太兵衛

池原村十七荷夏より除くにつき今は家数七拾余宗旨帳に

益田村

与兵衛　四郎兵衛　長大夫　四郎九郎　庄兵衛　庄大夫
忠大夫　次郎兵衛　与三大夫　助右衛門　三右衛門
七兵衛　弥大夫　清左衛門　次郎左衛門　七郎右衛門
藤大夫　平兵衛　助大夫　藤郎右衛門

砂郷村

四郎九郎　七兵衛　四郎右衛門　長兵衛　四郎兵衛
四郎兵衛　吉兵衛　九郎兵衛　徒右衛門　又大夫
長左衛門　助大夫　長大夫

外一　とりいなり神社　砂見氏

出河原

九大夫　義大夫　吉兵衛　七兵衛　義右衛門
義大夫　与兵衛　次郎兵衛　次右衛門
次左衛門　次郎兵衛　太郎兵衛　惣右衛門　三下大夫
義大夫　義右衛門　仁大夫

外田新邑新田開発之事

なり堤　横堰成就　砂見百姓願書

扨又此里の前を流るゝは庫川と号してその源は山城
国丹波山の麓より丹波を経て四個国の水源に溢西国一
の大河なり然るにつつの流るゝか此郷の前より二流となりて中
島をなす彼山脈九方里つゝ思ふやう前なる中島は新畑に成
竟の土地ならんと未成方里つゝ七ヶ所の去ヶ所の表を
助方実中与ヶ所の方ヶ所合ヶ所ヶ所中ヶ所此内ふの
中島に新田を開発せば必穀成熟疑ひ無し新畑なるべし
なるべきいかにと申さるれば何れも尤もと同じける然らば
所て人数を招く同業なるべしと評議しけり此は文禄二
年癸巳正月下旬の事成りしが数多の人歩を揃へ鍬畚鋤鎌
鶴嘴等を用意し終日切積りしが三月下旬に新畑凡十町ば
かり開発して夫より植付時分に成りければ新別高下なした

酬なし木綿粟黍稗大豆等を植ける此新田の中に大きなる
森あり則此所の氏神の地に定めんと申合せて退置森
より南へ家を建て其兵衛（平兵衛先祖）次郎兵衛（武左ヱ門先祖）太郎兵
衛（太平次先祖）出る日を中と云九右衛門（山脇家先祖）次郎兵衛（武左ヱ門先祖）
茂右ヱ門（松庭氏先祖）七兵衛（武大夫忠左ヱ門清左ヱ門先祖）吉兵衛（武左ヱ門徳左ヱ門五兵衛先祖）彦
右衛門（字左ヱ門先祖）森の東に家を立て出る日を東と云右の人
々新作出精を致しけるに弾の外豊作にて五穀百倍す
人々喜ぶ當分貢に入らず昔仁徳帝の時を尽さゝぬ
治世と申せし今此時と悦び先氏神を崇すべしと社を造
営の評議面々之折から中秋の霖雨にて川水増り井積覆又
流れ来りしを引上げ先善議成就する迄白幣を結ひ氏神と
崇べしと申と森の中へ祭り能野権現と唱奉り爾今わくの宮

と申す此宮の西に大木あり是を大歳大明神と崇め石の祠を建立したり又源大夫方へ新開の通達を致ければ好身三郎大夫九兵衛先祖庄大夫宗大夫先祖申合西河原に新田開發す源大夫舍弟四郎左衛門新太郎先祖は砂部村に居ながら二町余り開発し支配人として好身の者を出し置けり長右ヱ門仁兵ヱ先祖同時益田村宮本藤右衛門忠右ヱ門次兵ヱ先祖と申者家を建て出る是に依て土新屋と云傳ふ又神吉村より庄左ヱ門博右ヱ門先祖芦大夫益田より出る其後傳右ヱ門今傳右ヱ門四代目と長右衛門崔兵ヱ先祖八兵衛六良兵ヱ孝兵ヱ先祖七郎兵衛次兵ヱ先祖東へ出る其他近村より段々に出て凡三十家年新畑計於余所叶開発す西の河原に少しの開地あり之を三所申合年歳德神の祭田に開べしとて即時に畑に致し付置それより正月十四日に頭興行し餅を搗て饗應す其風

として東中條齋頭今に至り餅を振舞廻るに此在所新畑人々身上宜く繁栄しければ世間よりは出河原隱里と申せしなり家數增に付在名を改貢物に大豆を捧ぐべしと申合せ先役人を定べしとて茂右ヱ門を庄官として立人但頭には七兵衛九右衛門立軒屋に新源右衛門中に新与兵衛芦大夫次右衛門と定め席頭申上新田百九拾七石十弐升の在所と成りける

或說に

或時農長芦右ヱ門他行の折から宇人と覺しき大男三人大木を横へのさくと来り上座にのさばり聲をあらゝげ我々は西國宇人上方へ奉公かせぎに上る所路銭盡たり為

月三十貫文合力受用すとつふ内方出向ひ亭主は他出
しゆにはにたられず殊に此処は比日の出村なれば世にかねと
ては主せんもなし外村へ時出下さる〳〵様と断こふ程付上
り武士がかく云出し其分に渉そうか銭がなくば着類成
共早く出せ其上にて了簡もあらんとこゝ家内驚きいかゞ
せんとさわぐ所に森彦左ヱ門其長六尺ゆたか藤柄の大
脇指をさしよる棒提け一文字なにぬきまゝやにはになぎすて
につくい迫人めら敵殺し河へ引流すは安けれども責て後
生願はず其命はかりは助置くどつち〳〵とうせをろ
と引立つれと見たしず斬捨待下さるませとすねをもみ
這廻て失にけり其砌は非人番はなし色々の悪量度々
汝たり込しとなり九右衛門家中にて彦左ヱ門は棒の

名人にて時の人なり棒の彦左ヱ門と申けり其程の棒本家た
傳へ為よし彦左ヱ門に男子四人之八良兵ヱ六大夫弥右ヱ門小兵ヱ此小兵衛
若き時分小兵にをしか角力の名人にて名乗を森小雀
と云後に剃髪して法名西入と号すれ九十三にて往生しら
れけり小市兵衛先祖
其後芦右ヱ門老衰し退役田中七兵衛庄屋役相勤
男子三人有猪左ヱ門次郎左ヱ門次に猪左ヱ門其子七兵衛其子伊
兵衛庄屋役相勤病身故弟伊左ヱ門其子文次郎是迄
にて庄屋退役其後万治年中の事なりしが蓮堤普請出来は元禄年中
中すゝ六十余年後の事なり榊原式部大輔忠次公姫路城の砌或時
家中残らず召出され仰られすは古加古川に三慮すゝ先祖
一西国の大小名を初メ往来の旅人飛脚ず天下の公用為心共

繞の間に二渉少し水の高きにも二里の陂有と聞く益田の前
より舟本の西川横に土堰を築渡し一所に極めなば萬世の動
即ならん扨又風雨洪水に水下数十所の村々田畠粒も塩埋り
人家野数流亡し過分の水損是を救はん其二つ三つには
益田の河原より米隨堂の下に至迄新田新畑を開発し農民耕
作厚ければ国家豊饒の基なり面々如何のにと仰あり満座の
家中一同頭を低て黙入って申上るなく這は難有仰知謀なり
仰意の趣先以公儀へ對し仰出られ国土万民安堵の為弥に
天下泰平に治る仰代の仰奉仕何かは是に勝るべきはやく奥
行仕べと仰て申て仰前を立つ先其比は万治元年戊戌の
六月中ばの仰評定弐拾七所の大庄屋其組下へ觸を出し
四百世余村の小庄屋年寄厚く高に寄せて人足割付

同き七月十六日と日を定領中の山崎川辺八面田仰飯畑畦畔を潰
野部堤以上八組其外弥る組々にも仰付られ人数雲霞の
ごとく集りさしも廣き河原に牛馬の通ふ道も無之益田
の農夫同き新村地内近十丁が間取分大事の場所なれば
根置十八間高三間三尺馬踏八間に水際には石垣。。蛇籠。鳩。
の杭堅く出来て築固既に八月上旬大半出来たりしに暴き雨天に
成り雨車軸をなし洪水夥しく一夜の内に流れて元の川筋と成り
けり奉行役人肝を銷して退けりそれより河水引を見合せ先
の人数に信を賜し人足を厳しく下知し三十日が間に成就しけり
右堤普請出来の事は天禄年中より六十年程の後の事なれども此時新
畑ヤ〻の減ずるにつて実に記す
今百五拾五石八斗五升新畑高有りと云々
或百姓積りて見るに高百五に八人懸一日に壱万弐千人

西度の夢請五十日人数合せて六千方此飯米老人に毒
弐千平にて七千弐百石其外往人附の僕小者晝食持
老方れは入るとの積り草鞋壱人に三足宛三銭價は
銀にて九匁貫目茶煙草味噌塩薪の入用数限り
なき費へと人々申あつり
外田新村開発文禄二癸巳の年より今安永六丁酉年迄
年数百八十五年に成る益田堤横積成就万治元戊申年
より今安永六丁酉年迄百弐拾年に成る
平之庄能野権現宮益気郷(ゑ家ゝ麦
抑平之宮能野王子権現と申すは紀州に垂跡の時　みの大臣
に命じ此国の始る時伊弉諾伊弉冉の二神立せゐ給ひ岩橋橋
ヶの国益気の山に在り彼土に分身の跡を垂んと宣ふ神勅に任せ

益気の山に社壇を建権現を遷奉る又伊弉諾伊弉冉の二尊天照
皇大神宮を勧請し奉り平志方名古瀬の三庄加古印南の両郡の
百姓崇敬し奉る昔は此山杉檜の大木生茂り風にすれ火自ら出て山焼
亡す其時能野権現は今の中山山に移し奉る則井積明神井面明神
と唱奉る印南七神の内之神前に八間四方の出水あり福井と申す御
手洗なり田地七八反程養ふ今此辺をやばせといふは八十橋の前な
るゆゑいつかの故氏子も方々へ離散すされ共二人残り一人は八十橋
の西南の下一所に住居宍粟田何某とつふ壱人は山の中程に居て田中某
とつふ(宍粟田与兵衛　田中七兵衛)彼中山の宮を山角村に大社を造営し信崇
し奉る此時当郡の氏子は平之庄益気の郷十六ヶ所山角村芝村小
野村萬栗野神本村陰山村原村小畑村一本杉村西山村中村里
村池尻村益田村同出西原砂部村迄十六ヶ所の生神也然るに

毎年九月三十日より同三十日祭礼神事勤し此時貧富に限らず
歴々と云ふを上座に居し段々格式を改め酒盛有る亦時文祿
三年甲午の九月祭礼になりしかば十六ヶ所の頭人年詰し皆上下
を着し鰐口打鳴し神前に向ひ九拜し扨各々座に着默礼終
り夫より神酒盃を頂戴し四海浪静にして難波の事にいたる迄
豊なる世の例ひそ實に道廣き納めかれ九献の盃納りける時
益元の人々進み出て申すはいかに平の面々益軍の中たり郷
士歴々もみな下に居ぬふ以来此度座を改め我々が
上座ぞと申す平の面々申さるは尤何れも歴々なれども益元
の人々は殺生を業とし ぬふ殺し氏神は毒地十一面観世音菩
薩仏躰にて御座殺生は十悪の第一大悪人のいつれも上座に
は穢はしきと申さるる益元の人々申さるは夫日本は神國な

り當社は素くし天照皇大神の御子天忍穂耳尊にて在す大神
の御弟まの素盞嗚尊は八岐大蛇とふ頭八つ有る悪蛇を退治
し其餘の悪魔悪神を亡し日本を治ぬふ又御子大己貴命
は種々の難事を施し人間の病患を愈し五穀成就守り神此神し
御親子共に悪魔を退治し給ふ是を大里神と崇奉る此神
の御子事代主命は忠孝全備殊に八十万神の將軍にて御親子
共に武徳兼備ぬくば賣買利潤の神のみにあらず此両神は天子
將軍公卿武家町人百姓まで信仰す是を笑姿神と尊奉る
此御神は元より殺生を好ぬふ去るによつて今に至て繪像木像何
れも右の御手に釣竿推の花の脇に大きなる鯛を狭ぬふ定て各々
に尊敬し玉ふ殺生を忌給ふ者は此神信仰は不相應但
し欲心から尊敬か神は非礼を請玉はず聖人顔する各々

も毎日毎夜諸の出けらの命を取ふ日ごとに殺せ時には何れも
大男人上座に坐のさばり居らるるは織らはし勿躰なしはやく
末座に下りゐつくと申ける事の勇々大きに怒り事の土地に足踏込
ながら雑言吐は奇怪なる古事なる定たる座着を今改めん
とは法外至極甲が金利に成てし之はならぬ其方たちは
ば此方にも堪忍なるずもう是迄なる益気の面々早く座を立
れよとずつと立て御殿に向い拝礼して七本立たる金の床帯
三本うめくしく捧数の人々前後を守護し神前を下りける中
にも四五人先達て里村の農長前川何某が宅へ案内し弓鉄
砲暫く借用申度と云ふ家の長と見しき者出向ひ定て鳥
を打慰のためなら人安き御事とて弓鉄砲玉薬矢を取揃へ
て出しける人々悦び引かたげ池尻さして急ぎける跡押へに残し

たる四人の強兵主ことをそうや此迄なきやつあら一人なるそ人質
取れとて大勢どつと落重り立重めやらぬと引留大前駆為石
生いさんなるうづもしめら別所中三郎長沼の家臣武仲鬼彦兵
衛とは其が事なる先年神去城責の時三本の槍より壱騎当千に
撰ばれ梶原大五郎先菴と共に加勢たる事度国郡に渡り合槍の
行術を走廻り我軍に帰定の家の子神去藤太夫氏の女心安
民部大輔を討取陣矢せしに依て軍破れ先菴は自害し拍子中
村藤田太は討死し其は槽より城中へ飛込し天に定の手の軍兵
鑓先を揃へ城中を突通る事なる哉水底に大石あるしと思に か
つぎ薄手少々負ひたれども命全ふ水底に居る内日も暮城
を忍ひ砂部村は我出所なれば親元に立頃り其元東角
力を好み兎彦と異れし此近郷に手に立者なりしぞさあ

面て見よと仁王立に立たりけりやあ廣三はく曲者め大勢恐れ
とどつと寄るをかたはしつかんでひろひ投負投大腰首擲
障泥合掌肩すかし矢倉さはたに打付飜付ちり飛す此
勢に恐をなし皆散々に逃にける其隙に益田山の面々平山に恐
上り（今の薩現山平山の四郎兵衛か社なる由）先此幣を益田山に納とて平山四郎兵衛
其長六尺有余の大男三本の幣を引抜刀平山を峯を考
に益田山勝ちぬ（退笠なれの下に納けり其故此時より平山平大
夫と申けり）扨平山は兼て覚悟の事なれば前に大幕を
打ち鉄炮能手飛口杯を並べしは陣の備に異ならず磯
野隈大夫申さるるは定て大勢追恐来るべし卿此方
には大勢一時に出べからず発兵四五人宛程かはるがはるに出て
息のはづむをうかがひたのあらすべし但し壱人も殺害すべからず

殺しては後日の敵度たるべし其先年京都三十三間堂にて六
十六間の矢数を射通し播州磯野源内大夫と京近辺に
参を顕はせしも勢義家の弓はおどしの為に矢を放ち
見せん何れも五様心得られよと云るるに安の如く屏風嶽
の麓まで雲霞の如く追かけ来る磯野すはやと弓を引矢
を射る勢鉄炮の名人山脇九右衛門十人余又右衛門前川仁兵
衛鉄炮遣同なく放つ音きびしければ追恐まとし人々云
やうあのやうな無隠左無薬躰に構なると皆々師に引取りける
益元の面々大きに喜びさあらば寄を引取て益田山に引取ける宣
に是ぞは壱騎当千のつはものと謂つべしと末世に其名を残し
ける

此時下郷近村より平の宮喧嘩と聞よすはこそと云ふ程こ

そなれ我りしくと怨付し故数万人に見えけり又前川助
右衛門其時分庄屋之大幕幕鑓を出し金扇前川仁兵衛
より長刀式間あまた出す十余又右衛門より鉄炮らを出す
御奉行右衛門より丸に二引の紋の旗を指こ此時黄昏に
及びしかば提燈松明星のごとく峯には焼燎し故山と野
しかくやきしかば唯白日の如くなりしとつふ

熊野権現遷宮之事

并神職高橋氏に定る事

七社宮神躰由来の事

斯て其年も暮明れば文禄四乙未の二月中になりぬれ共
平庄益気の郷に恐れしりや又分治せしを幸とや思はれけん
重に何の異乱もなかりしかば益気の面々大によろこび先宮殿
を造立し春三月三十日遷宮と聞えければ氏ふは云ふに及ば
ず近郷の貴賤老若男女引りちぎらず参詣す此時高橋
次郎左衛門神職の儀を相勤む今こ高橋氏は左門先祖なり
抑高橋次郎左衛門出不を尋ぬるに神木の臧主高橋平右
衛門尉何其の一類なりしが三木乱の時平右衛門尉滅亡
せしかば次郎左衛門没落の後浪人して益田村山脇
与兵衛某の許にかくまはれたりしなり
既た刻限に成りしかば露拂紺の袴を着し二人宛式行に立ち
先平山平大夫山脇助大夫立烏帽子に布衣を着し供帰を
目八ぶん捧げ次に高橋桃色の直垂折烏帽子を着し笏を
持其次に四ヶ所の頭人懸烏帽子素袍袴を着し刀を帯し
其外の面々上下を着し俱奉し供神躰を内陣に移し奉り

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235
ガラス使用

太きて九拜す皆々頭を下げて拜礼し神前を下りけり
廻るに〳〵今度氏神分社に付勝利を得し事を祝し四ヶ
所す壇尻をかざり練まる先砂部出河原壱つに子供
狂言讃岐八島の合戦をはじめ次は當所外田子供狂言
長門壇の浦の大軍三番池尻子供勸ち渡辺綱羅生門
鬼神退治見物の貴賤餘多なく初り〳〵面白いさぬき八島
の戦能登守の弓勢次信が胸板を射ぬかれ馬ずまつさか
さまに落たるふびんさ壇の浦箕尾谷四郎と西七兵衛景
清かしらゝ引みなのやかい首の骨もつよし景清が臍の緒
さ又わたなべが羅生門にて鬼の腕をねじり落し一気味のうまさ
今見るやうに思はるゝと日も入相の鐘とゝもゝ鳴したら〳〵
帰りけり右の吉例そ毎年参詣には四ヶ所寄合い同事をす

さるによつて外田の景清池尻の羅生門出河原の船軍とゝ唱へ
たり其後寛永三年丙寅の九月上旬池尻村へ分流す今
安永六丁酉の年に至り年数百五十二年に成る又其後寛永
十七年庚辰九月上旬外田新村へ分流す今安永六丁酉年
迄百年に成る八年に成る三ヶ所の宮神職高橋勘大夫と申す仁
京都吉田殿神道傳授いたし高橋和泉守と申す御印書
頂戴其子八十大夫延月し高橋和泉守と申す十ヶ年相勤
其次を勘大夫と申す是亦延月高橋近江守と申十四ヶ年相勤病
気にて社務相勤らず弥三大夫甥次良兵衛則近江兄と假
役にて寛延元年辰の五月迄十ヶ年相務め病死す麹屋清
兵衛末子雅名金之助を次郎兵衛養子として神職相勤む今の高
橋喜大夫なり扨此喜大夫は誠に神慮にも叶ふべき人なり住古に

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235
ガラス使用

明神の御託宣に吾に神躰なし正直を神躰とす我に神德なし慈悲を神德とす我に神通なし無欲を神通とす此御託宣の如く正直外一にして身の裁束古びたれども新しく指へて容躰を繕はず官位昇進の望まもせず當世は或は社坊と公事をこひ社人同士は格式を爭ひ座の上下を論じ邪欲の振舞ばかりなるに此喜多夫は誠の神主なるか

御神号

第二　八幡大菩薩

〃　三　伊和大明神

〃　四　劫見大明神

〃　一　若一王子

〃　五　小守大明神

〃　六　十禪師

〃　七　牛頭天王

若一王子の御躰は地神二代忍穗耳尊也天照大神の御子にてまします高見むすびの命の娘たゝはたちぐのひめを娶て天津彦火瓊々杵尊を生ぬ八幡大菩薩の御神躰は人王十六代應神天皇なり仲哀天皇第四の王子御母は神功皇后四歳にて太子に立七十一歳にて位に即王ふ在位四十一年庚午の四十一年三月十五日百十一歳にて崩御安永六丁酉年迄凡千五百三年に成人王三十代欽明帝の代に神と現じ豊前の宇佐の宮に出奉る白幡八流降り立たる謂有によつて八まん大菩薩と申す清和天皇五十六代の御時山城國男山へ勸請すと云々

伊和大明神の床神躰は大己貴命也素盞嗚尊の床子に
て是即大國神也大黒の神躰を見るに長短く圓に顔
色温れにして黒く笑顔をぬくみ帽子を被たの肩に袋
を負い右の手に槌を撞て二つの俵を踏ゐ(り今世の人の大
黒と称して祭り奉る又恵美須と申奉るは床子事代主
命にてぞ[illegible]ましける抑大己貴命は床母をば稲田姫命
と申奉る出雲國にて生れ玉ひ武徳を備へし床神にて世に國
造の神とも申奉れり元御徳によりて七名ぞ[illegible]ましける其
子凡一百八十一神有少彦名命与戮力一心經營天下玉
ふ云々
劫見大明神の床神躰は天神第一神國常立尊にまし
ます天地いまだわかれず陰陽わかれざる時まろかれたる

と鳥の子のごとしくゞもれて牙をふくめり其時清陽なるものは
靈霊て天となりおもめく渾物は滞て地となる天地已になりて其
中にものゝかたち葦牙のごとし化して神となる是を國常立尊
と申奉る日本を葦原の國と云ふ此義之近州日吉二の宮
の社の床神躰なり
小守大明神の床神躰は底筒男中筒男表筒男神功
皇后是を住吉四社明神と唱奉る人王十五代の女帝仲哀
帝の后氣長宿祢の娘なり皇后群臣と三韓を征伐の
事を議し玉ひ則諸國へ勅して船を集めて武具をとゝの
へ軍兵をめしあつむ怒りとゝる大弓に此時始て作り皇
后みづから斧鉞を取て諸軍を下知し玉ふ住吉明神の
靈出て床船を守り先鋒し給ふ此神水神なる故之床

船既に和珥津より出る時波風甚荒かりけるが海中の大魚
多く浮び出て御船をさしはさみ奉れば波風をだやかに
なりて幾程もなく新羅國へ着玉ふ新羅王大に恐れ
是は日本の神兵成べしとて拒事あたはず自囚となり素き
縛を立て降参し永く日本の奴と成て貢物を捧べしと申
す官軍新羅王を誅せんと申す皇后下知して其命
を赦し其國中へ入て財宝の入たる府庫に封をつけ繒
図書物を收取り皇后杖につき玉ふ矛を新羅王の門に立
後世のしるしとしたまふ或説には新羅王は日本の犬なり
とうにて書付玉ふ新羅王則ち人質を奉りて金銀并
色ある絹様々を船八十艘につみて奉る新羅百濟高
麗是を三韓と云ふ今の朝鮮是なり皇后は夫より

飯朝し玉ふ云々

十禪師の御神躰は地神三代瓊々杵尊にてまします天照
大神の御孫之高天原より日向の國へ天下りて葦原の中
津國の主と成玉ひ木の花さくや姫を娶て彦火々出見
尊を生玉ふ

牛頭天王の御神躰は素盞嗚尊にて在す伊弉諾伊弉冊
尊二神の四男天照大神の御弟なり御子大己貴命と共
に葦原國の種々の悪魔を退治し日本をおさめ給ふ
魔猛の御神也

熊野權現の社は紀伊國牟婁郡にあり社領千石有り祭神三座
伊弉諾尊事解男神速玉男神也本宮は牟婁神天
皇人王代の十六年に始て建立新宮は景行天皇人王十二代五十

九年に建立那智は亀山院（人王十九代）文應年中建立ル
熊野権現と崇奉り誠に災難無疑をはらし
ゆふ誓神なり尊とゝ信ずべし

夫國常立尊ト申奉ルハ乃神代最初ノ國主ニテ在ス次ニ
國狭槌尊次ニ豊斟渟尊次ニ泥土瑞煩尊次ニ沙土瑞煩尊
次ニ大戸之道尊次ニ惶根尊次ニ面足尊
次ニ伊弉諾尊伊弉冊尊ツレテ天神七代トイフ妙理大菩
薩ト号ス加州白嶺権現ト申ス日域男女ノ元神ナリ
天照大神次ニ天忍穂耳尊ノ子天津彦火瓊瓊杵尊天
祖天照大神ノ勅ヲ受隆リテ此國ヲ治メ始メテ土地ノ住居ヲナセリ
國ヲ御食ルコト三十一萬八千五百四十二年彦火火出見尊ヲ生リ

國ヲ御食ルコト六十三萬七千八百九十二年彦波瀲武鸕鷀草
葺不合尊ヲ生リ國ヲ御食ルコト八十三萬六千四十二年コレシ
地神五代ト名ヅク人王第一ノ國主神武天皇ハ鸕鷀草不合尊
第四ノ子也御母ハ玉依姫ト云ル龍神ノ乙娘ナリ御歳十五歳
ニテ太子ニ立玉ヒ四十五歳ニテ日向國ヨリ船軍シ發シテ筑紫
シタヒラゲ其他諸國ヲ廻大敵ヲ亡シ十年ヲ経テ都ニ帰リ
玉ヒ五十二歳ニテ位ニ即玉フ在位七十六年丙子七十六年三月
十一日二百三十七歳ニテ崩御安永六丁酉年迄凡年数二千
四百三十七年ニ及ブ是人王ノ始メナリト云々

磯野源大夫武中彦兵衛三郎大夫を伴ひ三木へ行
大酒の上大力ゝ事

或時磯野傳左衛武中之丞岳に出合ひ源大夫申さるゝ
はいかに武中今日は天気さに三本へ行給はぬかと云彦兵
衛尤宜しからんと源大夫は武人の寸の刀彦兵衛は武人の寸の
刀指　はるし三大夫を伴ひ三里の道をのつかゝとあゆみ行
扨酒屋に入り酒壱升つかせひきさゝへけり三人して呑ほしけ
る亭主はあきれ之出て申さるゝは毎々は酒好そうな
手前に初屋とふ名酒あり壱樽饗應申度と盃を差
出す源大夫はやりと笑ひ我々えより酒ずき又味意を肴
にも紙包屋外のものの馳走を乗なし相生の松風之端に
よかろと盃を押戴き三人して又壱升の酒を呑みいらぬ雑
作と一礼して酒屋を出けり亭主は驚きいわたしてい合点の行
かぬ曲者かな空あて道路にゝゐふれふし大事の刀も奪取

られん見え隠れに付て見ると手代を出しければ図々し（まて源大
夫申さるゝは運賃米九俵預け置く能い序なれば持ていか
かと云ふ三郎大夫云ふは何とも荷い様なしといふ源大夫どりや拾へ
やろうと大竹根引にし握ひしぎれんじやくにし三人分三俵宛
背負ひ小歩ふしにて帰りけり
或説に神吉庄長慶村の農長源右衛門つは米八俵目の力
ありしなり鉢鹿川万五郎が先祖之又砂部村庄官彦兵衛は
米七俵目力あり或時公用にて姫路城下へ行しが戻り懸
り思はず夜ふかし福井村東はづれ過しじゝん村雨しきりに降
ければ山の麓に大きなる隙穴あり是幸の雨やどりと奥の方へは
いりし天へ盗人十人ばかりどやゝ来り是も雨をしのかんと穴の中へ入
りけるが頭と覚しき者云ふは幸い時分の宿で五文餅十を

買つて来た壹つ宛配当せんと云皆々喜び手を出して受取るいやこりや壹つたらぬ慥十をの餅わがどいつぞ二重取はせぬか此中に性の悪いぬす人はないかと せぐすれども頭がこふはさて〳〵今夜はぎろんのわるいぞ働に行夜さでならぬどいつもいくで床伏と皆ちり〳〵にわかれけり 兵衛も師より出て当りし餅を出し穴の口に置こうやかうすどの置みやげと安てわが家に飯りしとなり ○五ちゑ孫兵衛 杉中孫左衛門 杉中孫左衛門 此人は杉中孫左衛門 故かくら今約左衛門 善左衛門 此三人は高瀬舟をつかひしとく善左衛門は後に船を山脇九兵衛に譲る善左衛門に妹壹人あり是て来こ俵国の力ゑり時の人 時とゆくとちしとく是は加古郡下西條村大西六郎兵衛方へ嫁せしとこ善左衛門百壹才迄長命

此連合は九十六迄長命時の人百姫とゑひしとく善左衛門に男子四人ゑ五ちゑ嘉兵衛 安右衛門 四郎左衛門 安兵衛 ○嘉兵衛子 伝兵衛 平左衛門 ○安右衛門子 男子四人 孫兵衛 孫左衛門 孫七郎 孫次郎 ○平左衛門子 ○四郎左衛門子 孫兵衛 孫左衛門 孫七郎 孫次郎 孫作兵衛 孫右衛門 ○伝兵衛子 ○安右衛門子 ○孫兵衛子無し作兵衛子養よとして 甚五 今の安右衛門 則孫兵衛子 初のうん兵衛 甚五 孫右衛門 ○八郎兵衛子 三右衛門 甚左衛門 八右衛門 ○甚左衛門 ○甚左衛門子 長兵衛 孫兵衛 ○甚左衛門子 孫兵衛 ○二兵衛子 ○甚左衛門子 長兵衛 孫兵衛 ○二兵衛子 ○甚左衛門子 孫兵衛 ○二兵衛子 ○甚左衛門子 孫兵衛 ○二兵衛子 ○甚左衛門子

殺〻にして九そ三拾家餘に盤踞しけるこそめ
でたけれ

山脇九右衛門 磯野源大夫同道にて二見へ行る
并 両人大酒に乱伏こゝろ

扨も磯野源大夫山脇九右衛門は常に大酒をゝみ
三本二見の酒肆へ酒花に通ひけるが或時両人彼殉織を
着て南朱印を首に懸け源大夫は助尺寸の刀九右衛門は
弐尺三寸の刀を帯し二見へ行道すがらもつゝつゝましく見へ
ければ往来の旅人も恐れをなし下馬せぬものはなかりけり
扨酒店にて上座にのさばり両人して壱升のみ尽すに礼して酒
家を立出しが強の外酔乱道端の松の枝に朱印を殉織にゝみ懸
置前後も知らず伏臥たるを折節盗人通り今も能く寝入りた

るを見すまし懸有し殉織を奪取り行方知らず失せけり暫
くゝして両人目を覚し邊を見れども彼殉織はなし短慮の
九右衛門くわつとせき刀提扨は盗人ござんなれ追かけて取り
返せすゝにかりさいなまんと立あがる源右衛門押留狼狽しゝ
なれ右衛門盗人の行方も知らずどこをしようこに追懸ゝふ費
花の内に之宝物を奪取るゝが此方の面目
昔源頼の綱は羅生門にて鬼神の腕を切り取りしが目前に
通られた源四郎の勇者なれども吟味に手なし変化に魂う
ばわれしは是非なし偖〻久米の仙人は色欲に迷ひ通力
を失ふ我々は酒に長じて本性を失ひ大切の物を奪はれし
も何事の事も因縁づくと了簡付て見られよと制しけれ
ば御々に内得し然らば其意に任せんさて〻命冥加な盗

人めとつぶやき、打連帰りけるそれ物語に今に伝り侍りし
物なり
漸砂部村礒野善兵衛に弓経侍りしを孫太夫、本家の由
礒野源右衛門、踊本家安右衛門に刀一腰半弓一張箙一
器傳来せり大弓は荷なあい様して折しとそ
○山脇九右衛門助大夫（後に助兵衛とつふ）男子五人有（助大夫条兵衛 清兵衛 右衛門）
（平兵衛）○久兵衛子（徒兵衛 左兵衛 忠兵衛）○忠兵衛（後に久兵衛 仁兵衛）
子（次郎左衛門 助三郎 久兵衛）○庄兵衛子（今の左兵衛）○半兵衛子（忠兵衛）
○清兵衛子（六郎右衛門 後に平右衛門 孫右衛門）○孫右衛門子（今孫右衛門）
（兵左衛門 仁平）○右衛門子（善兵衛 新兵衛）○右衛門子（善兵衛 新兵衛）
○右兵衛子（右六郎 十次郎）○太郎右衛門（剃助 太郎右衛門 佐）
○中窪與兵衛子（八郎右衛門 平兵衛）此平兵衛は善兵衛の山脇助兵
衛の末なり○八郎右衛門子（徒右衛門 久兵衛）○武右衛門（今の
武右衛門）○平兵衛子（平右衛門 長兵衛 義兵衛 平右衛門）○平右衛門（新右衛門 伊右衛門 百四郎）
○九右衛門子（平左衛門 義兵衛）○長兵衛子（孫兵衛 徒兵衛）○義兵衛子（今の
右衛門 右衛門）○平左衛門（義兵衛 剃髪 自性と号す）○元右衛門（男
子なし山脇久兵衛息徒右衛門 善兵衛）○徒右衛門子（兵右衛門 元右衛門）
○兵右衛門子（兵右衛門）○元右衛門（流右衛門 兵右衛門）○山脇九郎右衛門
子九郎兵衛○九郎兵衛子（仁兵衛 九兵衛 吉右衛門）○九兵衛子（左七郎）
（東正竹 九郎兵衛 文兵衛 忠右衛門 九郎右衛門）○仁兵衛子（後に仁兵衛 八郎右衛門 徒兵衛）○仁兵衛子（善兵衛 徒兵衛）
秀庵（徒右衛門 伊右衛門）○徒兵衛子（徒兵衛 善兵衛）○徒右衛門（新右衛門 善兵衛）
去程に山脇九右衛門儒道を立る事既に二千の比つくづく思はれけるは

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235　ガラス使用

吾壯年の時は殺生をこのみ種々の鱗を殺し雞兎を打取り罪に罪を重ぬ今更悔むに甲斐なし次一仁の道に外れたり是より殺生を堅く停止し儒道を立慈悲を專にし別して藥を施し諸人の病患を救ひ醫者となり次は山脇九郎兵衛（稚名長助）其次は山脇九兵衛（初は元竹と申す）其子東正竹京都典藥頭保生院浦野道央の門人と成て御公家石山中納言殿同く三位殿家醫者山脇養石と呼しけるが此仁は儒道を全く行はれし事皆人申あくり仁心あつく貧窮の者病患の時は藥を施し或は道橋を修造し父母に孝養をつくし子に臥し寅に起て學文を博く十三經に渉（毛詩 尚書 禮記 周易 左傳 公羊 穀梁 周礼 儀礼 論語 孝経 荘子 老子）謂つ之十三經亦醫の奥儀をさぐり本道外療を兼備

君子不以紺（紺）纖（纖）飾（飾）とやら身に衣服を撰ず紙布の羽織藺の編笠を着て徘徊すれども其德他國に聞え允武拔ケ國より眼病人来りて名を揭られ田舍には無比類名医なり養石の名は中庸に今夫山一養石之多及其廣大卅木生之禽獸居之寶藏興焉是より撰出せり寶暦五乙亥十二月十八日行年七十九歲にして命終則法名釋養石と呼す息冬松（幼稚名小八）相續せられし不安永五丙申の十月七日病死歲五十四才法名釋祐振（ゆうしん）と号す

中

○松下太郎左衛門甚左衛門　○甚左衛門子太兵衛の大兵衛（太左衛門次兵衛）　○三郎兵衛子甚左衛門（三助是は養子なり故に三郎兵衛子甚左衛門）其先き不知此家を今に加ヤやと云ふ

年
久太夫子清左衛門子庄九郎に清左衛門と云 先祖の名は不知
小太郎清 太郎清 孝左衛門 孫七 孝左衛門
今の左衛門 先祖の名不知

五郎左衛門と云人井口村より出 其子孫清左衛門
子孫清一出 清左衛門
清左衛門子 清左衛門
清左衛門子 武助
七郎左衛門

磯野源左衛門夫佛道帰依云事
世間はたゞ電光朝露の夢幻の間の楽ぞ
かし已に年月去り慶長五庚子の比かとよ磯野源左衛門今年
六十三に成られしが日と人相の鐘の声 諸行無常寂滅為楽と
聞に付ては佛道より外に楽なしと殺生を堅く止 もとより禅

宗なりしが直指人心見性成佛祖不傳不立文字本来面目
の言葉も六字敷書法濁乱世なり殺生を大いに仕たる身
なれば自力難行道の修行おもいもよらず幸なるかな十悪
五逆五障三従の女人男人も漏さず助なる本師阿弥陀如
来を頼奉り一念帰命し時佛の不思議五往生なりしめ給
他力佛廻向の佛流儀を仰ぐべしとて則浄土真宗に帰入し
佛事願尊とみ奉りしとかやされば高祖親鸞聖人の佛
語には一切の男女たらん身は弥陀のお願信ずべしてはかつと
助るとつゝみあらかられたる仰られたり亦本為凡夫兼為聖
人とあれば重要人を本と助るとなり宿縁到来して信心を
得奉るは亡母亀の落水にあつるかいとし貴殿賢愚老若
男女共に早く佛法にもとづくべし是より浄土真宗他力易行

国立国会図書館　タイトル『益気物語』　請求記号 216.4-M235
ガラス使用

の宗旨に帰依して改宗し當寺西念寺（今の妙顕寺）時の寺務慶存公を頼み檀家に成り弥陀の尊容を迎ひ寿り家は息義弟つに任せて昼夜當寺へ相談蓮師の文聴聞し亀山庵坊（は毎月廿七日の迫夜に御禮の為参詣し終に寛永三丙寅の十二月十二日八十九歳にして念佛の息ゝ安らに往生をしられしはあらかたかりける次第なり

今安永六丁酉年迄百五十二年に成る

亦時安永六丁酉歳陽月上旬

播陽印南郡益田新邑住

山脇助兵衛嫡流　山脇久兵衛一喜

集者　庭

宍粟田與兵衛歴流　宍粟田佐祐義紹

天明四辰五月三十日　四十四歳年終

○彦太夫子半三郎娘に彦太夫と改　○娘の義太に女子四人

五（おむ おた おし）　おつ（おし）　松川利右衛門　弟を兵五を養子にす

○彦太夫子（十右衛門　義太）

○山脇九右衛門　弟利右衛門に子供数多出　息　右太郎

子重太郎　市太郎子　○利右衛門子五郎太郎

今利右衛門に改名　兄十右衛門子七郎に十郎と改

○十郎太郎（孫　鄭　今家名と改　義太郎　中右衛門）　右太郎　義太郎

○与次郎太郎子八右衛門　○右太郎子八右衛門子六郎太郎

○六郎太郎子今の右太郎　大工平左衛門　清七　是は大坂へ出大工成由

子平左衛門今の六郎太郎と改　孫義是は伊右衛門に成る

○七右衛門子後の七右衛門に男子　結右衛門　○清右衛門子　勇助　母三郎

○小右衛門子　小右衛門　長右衛門　○六郎太郎　義右衛門　○清七　義右衛門子　今の清右衛門

○六左衛門の娘の六左衛門の六左衛門の孫左衛門の孫左衛門の孫

国立国会図書館　タイトル『蛙気物語』請求記号 216.4-M235
ガラス使用

（ナニ　ヤ　ヤ　ヤ

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『益気物語』 請求記号 216.4-M235

ガラス使用